“Phèdre”第一幕第三場についての考察(V)

村　島　実恵子

第一幕第三場でのラシーヌの韻詩が内包しているものを考察してみたい。作品を理解することはテキストを理解することでもある。

私達はこの戯曲の主要場面と向き合っている。ヒロインの女王フエードルが義理の息子イポリット王子に対する愛を主軸としたもので戯曲としては特に新しい題材ではない。彼女の弱さと自尊心から引っ張られてゆくのである。最後にはフエードル、彼女の乳母、そしてイポリットも死ぬことになる。

二人の登場人物、フエードルと乳母エノンヌは対立した状態にいる。フエードルは自分の心の秘密を隠そうとしており、一方エノンヌはそれをみつけようとする。彼女達の会話には均衡さが計算されており、ラシーヌはこの二人の登場人物に相応しく同じように長い台詞のやりとりで同化させようとしている。

私達はここでは特に乳母エノンヌによって引き起された二つのテーマをみることが出来る。フエードルが心に秘めた愛を告白することをためらっているのにエノンヌが打ち明けさせようとすることは生か死を意味しているのである。

最初の場面で、フエードルとイポリットの全体像が摑める。フエードルはイポリットを嫌っているようにもみえるし、むしろ彼をさけているようにもみえる。遂には彼を宮殿から追い出そうとさえする。それもイポリットが外国から宮殿に戻って来たほんの僅かの期間にである。当時彼の父国王は戦争に行って不在であり、王子イポリットは義母フエードルとテゼー王によって囚われの身となっているアリシ姫の安全を守る為に宮殿に戻っていなければならなかったのである。

イポリットと養育官テルメーヌが劇の最初の場面で話している時、テルメーヌはイポリットが何故宮殿を出発するのか理解出来ない。彼は女王フエー

ドルが王子イポリットを追放しようとしていると思い込む。彼にはイポリット王子のアリシ姫への禁じられた愛の故に宮殿を去るのであることがわからない。しかしテルメーヌはそのことを知り、イポリットの愛が彼を苦しめている事に驚く。

次の場面で、フエードルが自分の悩み、不安についての言葉で始まる。彼女は出かけようとしており、一人になりたいと思っている。彼女は自分を弱い人間と思っているが、彼女を悩ます悪が何であるか分っていない。

ラシーヌはこの場面ではユーリピデスの影響を受けて台詞を単純化し、冗長にならないようにしている。彼はフエードルとエノンヌの間の会話を内面化させている。ユーリピデスは少々粗っぽく、ギリシャ的劇的効果を狙っており、登場人物の貴族性を守るに相応しい表現をとっている。

ラシーヌの戯曲においては特に劇中の粗々しさを修正する為、クリスティアニスムの影響をとり入れている。これは19世紀のスタール夫人やシャトーブリアンに影響を与えている。古典文学は古代文学の模放であるとも云える。クリスティアニスム以前にはみられなかった内面の深さをもたらしている。

ユーリピデスとラシーヌを比較すると、戯曲の中においてもクリスティアニスムはフエードルの思考、意志がより磨かれることに影響を与えている事が分る。例えば、後悔、反省の感情は古代におけるより、クリスティアニスムによる所が多い。ラシーヌの作品においてのこの影響は彼のポール・ロワイアルでの教育に負う所が多い。彼はポール・ロワイアルの修道院の精神的静寂さの中で成長していった。ジャンセニスムに捧げる燃えるような雰囲気の中では世俗的なことは二次的なものであった。

この内面的力の大きさはユーリピデスよりラシーヌの方が多い。劇の場面は釣り合いのとれた慎重な計算の上に成り立っている。劇における正確さと方向づけは既に登場人物の態度、動作の教示がテキストの中で大きな位置を占めている事でも分る。

ラシーヌは既に書いたように、ギリシャ悲劇になれ親しんでおり、その結果彼はフランス悲劇では見られなかった音綴による音楽的リズムを求めている。ギリシャ悲劇ではコーラスが取り入れられている為、観客には筋書きが良く分る。せりふに続く合唱の部分は場面の急変を表現している。役者達も歌い、コーラスと交替しあっていた。当時の人々は一人の役者が主題について独特な声で歌うのを聴きに行ったのである。

この場面は三つの部分に分ける事が出来る。即ち三つの大きな動きがある。

Ⅰ：フエードルの登場

Ⅱ：フエードルの告白

a） エノンヌの懇願

b） フエードルのためらい

Ⅲ：フエードルの叙唱

第Ⅰの動き：フエードルの登場

フエードルの登場は観客には知らされていない。彼女はイポリットを迫害する継母として（39行目）観客に知らされていた。それはフエードルの出身（36行目）はパシファとミノスの娘としてである。そのことで観客にイメージを与えるのに充分であったからである。

最初の場面ではギリシャ悲劇で用いられる合唱隊が歌う歌章がある。これをラシーヌは悲劇の定型として用いている。153～156行、158～161行、169～172行。最初の歌章ではフエードルの身体の弱くなった状態を説明している。疲れきった彼女はやっと一歩を踏み出せる状態である。彼女は陽の光に目も眩むようであり、ひっそりと宮殿に長い間いたことが分る。光の輝きに一点のしみがついたように見える。

四行詩の型にもならない深いため息の言葉を発している。乳母エノンヌは祈りにも似た言葉を神々に捧げている。観客にはエノンヌが女王と共に嘆き悲しんでいるのが分る。

第二部ではフエードルの苦しみ、疲労、絶望が表現され、フエードルの不安、疲労、神経質さが彼女の外出を避けさせていたと云う事が理解され、全ゆる外見的な事柄が彼女を苦しめていたと云うことが観客に分る。

四行詩はエノンヌの独白で終り、その言葉にラシーヌはフエードルが重圧に耐えなければならないことを表現している。それは四回“i”という音で表現していることでも分る。エノンヌが自分の女主人フエードルに対してどのように対して良いのか分らない程の状態である事が印象づけられる。

163行～168行

V．163-168： Vous-même, condamnant vos injustes desseins,
Tantôt à vous parer vous excitiez nos mains;
Vous-même, rappelant votre force première,
Vous vouliez vous montrer et revoir la lumière.

Vous la voyez, Madame; et prête à vous cacher,
Vous haïssez le jour que vous veniez chercher?

丁度医師が苦しんでいる病人にするようにエノンヌはフエードルに説明しようとする。観客に彼女の不安をみせることになる。彼女は女王フエードルの憂欝さを克服させる為に外出するように望んだと強調するのである。この節の最後の言葉は節全体を要約している。

フエードルにおける矛盾、それは光をのぞみ乍ら、同時に隠れたいと云う気持である。第三節において、フエードルは太陽に向い、エノンヌには答えず、独りでいるように話している。彼女の、光、太陽への恐怖表現は正当な恐怖である、それを彼女は祖先から来ていると感じている。

フエードルは神（太陽）と世界（ヴィーナス）の神々に選ばれる運命にあったとL. Goldmanは書いている。“太陽は、フエードルが栄光を忘れて生きてはゆけないこと、ヴィーナスは、情熱を失っては生きてはゆけないとしている。”

韻詩は悲しみと恥ずかしさを表現している。彼女は自分の家系を思い出すが、この思い出も恥ずかしさの中に隠されてしまう。

フエードルとパシファエの相違は、フエードルはヴィーナスが彼女達に捧げた復讐による悪い運命であることを意識しているが、パシファエはそうではなかった。この恥ずかしさについては既にイポリットと彼の養育官テルメーヌとの会話の中でも話されていた事である。

Bonzonも言っているように“太陽＝力の象徴、ミノス＝モラルの象徴である。フエードルがエノンヌに自分の過去を告白する時は太陽に助けを求めている、それは彼女が無力の中にいるからである”

169行～172行

V．169-172：Noble et brillant auteur d’une triste famille,
Toi dont la mère osait se vanter d’être fille,
Qui peut-êtrc rongis du trouble ou tu me vous,
Soleil, je te viens voir pour la dernière fois.

フエードルはユーリピデスの作品と同じく、死を望んでいる。それは彼女の義理の息子イポリット王子に対する愛は実現不可能だと思っているからである。確かにフエードルは死んでゆくであろう。しかしその間に彼女が抱く悪はもっと荒廃したものになる。イポリットは出発しようとする。それは死

を求めることにもなる。

エノンヌの3行（173～175行）

フエードルの3行（176～178行）

エノンヌの言葉はフエードルには理解されない。

176行

V．176： Dieux! que ne suis-je assise à l’ombre des forêts!

フエードルは夢を追っている。森の木立ちの陰は彼女を隠してくれるし、光もさえぎってくれる。彼女が抱く幻影は私達観客からみるとあまり調和していないような気がする。

177行～178行

V．177–178： Quand pourrai-je, au travers d’une noble poussière,
Suivre de l’oeil un char fuyant dans la carrière?

これは不可能な響きを表す告白である。私達観客には彼女の言葉の意味する事が分らないからである。彼女が抱く幻影は愛する人が存在する事で美化されている。イポリットは狩りを楽しむ人であり、宮殿から森へしばしば出かけている事を知っている。

179行

V．179： Quoi, Madame?

エノンヌは仰天するが、理解していない。これはフエードルに於いては一種の目覚ましの役を行っている。フエードル自身の中で幻覚が起り、突然目覚めてゆくのが分る。

179～180行

V．179–180： Insensée, où suis-je? et quai-je dit?
Ou laissé-je égarer mes voeux et mon esprit?

彼女は自分自身を危険にさらす何かを言ったのではないかと恐れている。エノンヌの驚きは彼女が何かをほのめかしたと云うことであろう。フエードルが自分の意志以上の力に屈服し、自分を追いつめるヴィーナスの運命のしるしを感じる、それは彼女にかかる祖先の重みでもある。

この部分はジャンセニスト達を、フエードルのキリスト教的魂が恩寵に拒まれたのであるといって彼等を喜ばせた。ラシーヌがフエードルの著作に3年間かけていた間に古典劇とジャンセニスト的モラルに近ずいていったと考えられる。数年間の沈黙のあと、この作品を発表したことが彼の考えの結果

とも云えよう。

180～184行

V．180-184：Où laissé-je égarer mes voeux et mon esprit?
Je l'ai perdu: les Dieux m'en ont ravi l'usage.
Oenone, la rongeur me couvre le visage:
Ja te laisse crop voir mes honteuses douleurs,
Et mes yeux, malgré moi, se remplissent de pleurs.

フエードルは錯乱状態から己れをとり戻してゆく。恥のテーマは以前よりひんぱんに表われてくる。フエードルは求める神々に迫害される。

184行

V．184：Et mes yeux, malgré moi, se remplissent de pleurs.

涙は全ての結果である。ラシーヌの作品には或る悲しみに満ちた言葉がみられる。

第二の行動：問いから告白に至るプロセス

185～205行

V．185-205：Ah! s'il vous faut rougissez d'un silence
Qui de vos maux encore aigrit la violence.
Rebelle à tous nos soins, sourde à tous nos discours,
Voulez-vous sans pitié laisser finir vos jours?
Quelle fureur les borne au milieu de leur course?
Quel charme ou quel poison en a tari la source?
Les ombres par trois fois ont obscurci les cieux
Depuis que le sommeil n'est entré dans vos yeux,
Et le jour a trois chassé la nuit obscure
Depuis que votre corps languit sans nourriture.
A quel affreux dessein vous laissez-vous tenter?
De quel droit sur vous-même osez-vous attenter?
Vous offensez les Dieux auteurs de votre vie;
Vous trahissez l'époux à qui la foi vous lie;
Vous trahissez enfin vos enfants malheufeux,
Que vous précipitez sous un joug rigoureux.

エノンヌの長いせりふである。フエードルがエノンヌに告白したあとの言

葉である。エノンヌのこの長い台詞がフエードルの心にしばしの安らぎを与える。フエードルの乳母エノンヌはフエードルを放り出してはいないこと、生きる張りを彼女に持たせようと必死である事が分る。

フエードルの乳母エノンヌは彼女に母のように接し、苦しむフエードルを見てたまらない気持になる。これは次の二人の会話でも分る。この型式は特に第三場ではよく用いられている。以下図式により、フエードルとエノンヌのやりとりをみる事にする。

185～205行　20行　エノンヌの最初の長いせりふ
206行　1行　フエードルの悲しげな叫び
207～216行　10行　エノンヌの二番目の長いせりふ（じゃあ生きて下さい！）
217行　1行　フエードルの嘆き
218～220行　3行　エノンヌのせりふ
221～222行　2行　フエードルのせりふ
223～224行　2行　エノンヌのせりふ
225～226行　2行　フエードルのせりふ
227～236行　10行　エノンヌの三番目の長いせりふ（じゃあお死に遊ばせ！）
237～238行　2行　フエードルのせりふ
239～240行　2行　エノンヌのせりふ
241～242行　2行　フエードルのせりふ
243～245行　3行　エノンヌのせりふ

188～189行

Ⅴ．188-189：Voulez-vous sans pitié laisser finir vos jours?
Quelle fureur les borne au milieu de leur course?

この2行でフエードルは若いことを私達に示している。

191行～194行

Ⅴ．191-194：Les ombres par trois fois ont obscurei les cieux
Depuis que le sommeil n’est entre dans vos yeux,
Et le jour a trois fois chassé la nuit obscure
Depuis que votre corps languit sans nourriture.

この言葉で、フエードルは3日間何も食べず眠ってもいないことが分る。

197行．199行

V．197 et 199： Vous offensez les Dieux auteurs de votre vie;
Vous trahissez enfin vos enfants malheureux,

この侮辱（神に対して）と裏切り（子供に対して）は文脈の中ではより重要性がある。又これはキリスト者としての表現でもある。エノンヌ自身はフエードルの態度の前では誤った態度をとっている事になる。彼女はフエードルがイポリットに対して執念深いしっと心にかられた結果からの態度だと思っている。彼女は201～202行でフエードルに生きなさいと主張している。エノンヌは彼女に女王としての自尊心、誇りを持たせようとしてイポリットを悪く言う。フエードルの心を占めているのはイポリットに対する愛であり、想いから来ていることに気づいていない。

205行

V．205： Ce reproche vous touche.

エノンヌは自分の言葉が当を得ていると思っているが、フエードルはあえてきこうとしない。

207行

V．207： He bien! votre colère éclate avec raison:

この言葉でフエードルを励まそうとしている。エノンヌはフエードルの叫びはイポリットに対する憎しみからであると感じている。

209行

V．209： Vives donc. Que l’amour, le devoir vous excite.

“生きて下さい” これが長いせりふの（207～216行）のテーマである。フエードルは自分の子供への義務の為にも生きなければならない。

210行

V．210： Vivez, ne souffrez pas que le fils d’une Scythe,

エノンヌはこのようにイポリットの名前と彼の母シート（フエードルの敵方の一族）の名前を出すことによってフエードルの気持を変えさせようと考えている。

213行

V．213： Mais ne différez point: chaque moment vous tue.

エノンヌはフエードルを元気づけていると思い込んでおり、同じ考えをくり返すことにより、フエードルを生へむかわせようと努力しているのである。

214行

V．214：Réparez promptement votre force abattue,

食事も睡眠もとっていないフエードルの弱った体を早急に元気にさせなければならないとエノンヌは考えている。

216行

V．216：Le flambeau dure encore, et peut se rallumer.

生のシンボルであるこの炬火はラシーヌのイメージばかりでなく、この悲劇全体がくらやみ（悪）と光（善）の力の斗いの基になっている。それ故、光の清い純なものの前に、彼女は神聖なる祖先（ゼウス、ミノス、アポロン）が現われ、フエードルはそれにふさわしくないと思っている。

217行

V．217：J’en ai trop prolongé la coupable durée.

“En”は日々を表わしている。フエードルがエノンヌと同じ言葉を使っている事に注目しなければならない。

216行：

217行：

“Coupable”と云う語はフエードルの劇の中で発展させようとする罪の意識の最初の意思表示である。若い女王フエードルが死を語るのをきいてエノンヌが驚くのは当然のことである。エノンヌの仰天ぶりは218行の言葉の中で自問自答していることでも分る。

エノンヌはここに至るまで、フエードルの失望感は国王テゼーが出発し、イポリットが再び宮殿に戻って来たためだと思っていた。エノンヌは女王フエードルの悲しみ、悩みは国王テゼーの不在からであると思っていたが、フエードルが死までも考えている事が分りこれは重大なことであると気付くのである。故にエノンヌはどうしてフエードルが自分を罪深い女であると考えているのかといぶかしがる。フエードルには何ら非難されるべき点が見出せないと考えている。

エノンヌは市民階級の出身者であり、単純な行動感覚の女性である。彼女のフエードルへの問いかけは何かを疑った質問であり、訊問調の質問ではない。

220行

V．220：Vos mains n’ont point trempé dans le sang innocent?

この言葉はすでに悲劇の血に染まる結果の予告がみられる。

221行

V．221：Grâces au Ciel, mes mains ne sont point criminelles.

いまのところフエードルは無邪気な状態にいる。彼女が心の中に抱く罪の具体化はまだみられない。

221～222行

V．221-222：Grâces au Ciel, mes mains ne sont point criminelles.
Plut aux Dieux que mon coeur fut innocent comme elles!

“Criminal” と “innocent” の間の言葉の違いを注目しなければならない。

223～224行

V．223-224：Et quel affreux projet avez-vous enfanté,
Dont votre coeur encor doive être épouvanté?

エノンヌはききだそうとしている。

225行

V．225：Je t’en ai dit assez. Epargne-moi le reste.

フエードルは成りゆきに任せる気になり、又自分自身のからに閉じこもってゆく。221行から224行までのせりふ、二人の悲しげなやりとりになり、フエードルは罪について語り（221～222）エノンヌは彼女の女主人フエードルの精神的苦痛のひどさを見て驚く。（223～224行）

この二人の登場人物の各人の短かいやりとりに注目しなければならない。これはアレクサンドラ詩法（12シラブル）である。フエードルは短かいやりとりで何も明らかにしたいと望んではいない事が分る。エノンヌの質問は短かく性急な為、フエードルの無言症を何とかゆり起そうとしているのが分る。

226行

V．226：Je meurs, pour ne point faire un aveu si funeste.

フエードルの心の中には一つの選択が出来ている。自分の秘密を明かす位であれば死んだ方がましだと考えている。しかし乍ら一つの変化がみられる。と云うのはこの場面の最初の絶望からすれば、それは告白への道に大きな一歩が踏み出された事である。エノンヌはフエードルの心の中に彼女が疑ってもみなかった何かを発見する。フエードルは自分の心の中に何か罪とか死を選ぶような恐ろしい秘密を持っていると云う事である。フエードルの頑固さの前でエノンヌは自分は信頼されていないと感じる。結果としてこれはフエ

ードルの人生を失敗に導かせるむだな努力をしている事になる。

前述したように、女性は本能に自己を任せがちであり、エノンヌはフエードルを救おうとして全ゆる議論を展開してゆくのである。しかしフエードルの抱く心の不調をいやすにはまずその原因を知らなければならないと思っている。しかし新しい衝撃の前で彼女は傷ついた意識を持ち、彼女のさいごの熱意は自分自身をも殺すことになってゆく。エノンヌが女主人フエードルの為にする事は行動を起すと云う事でもある。その結果彼女は弁護する立場を緊張の時へと移行させる新しいテーマの言葉を云う事になる。227行目の“ではお死に遊ばせ”

227～236行

V．227-236：Mourez donc, et gardez un silence inhumain;
Mais pour fermer vos yeux cherchez une autre main.
Quoiqu'il vous reste à peine une faible lumière,
Mon âme chez les morts descendra la première.
Mille chemins ouverts y conduisent toujours,
Et ma juste douleur choisira les plus courts.
Cruelle, quand ma foi vous a-t-elle déçue?
Songez-vous qu'en naissant mes bras vous ont reçue?
Mon pays, mes enfants, pour vous J'ai tout quitté.
Réserviez-vous ce prix à ma fidelité?

この10行の新しいせりふはエノンヌの最初の言葉とは反対であり、励ましのあとの脅しになっている。

フエードルは一種の行きずまりを感じている。彼女はイポリットの純粋さが自分には欠けていると思い込む。と同時に彼女は夫国王と彼女の子供達の名誉と義務への心配もあった。しかしエノンヌはフエードルを追求する。

フエードルが死を望むと云うと彼女はすぐに、その前に自分も死ぬと予告する。これが彼女の最後の武器であり、しかもよりショックを与える武器だからである。エノンヌは彼女の女主人の心を痛め責めるのが何であるかを知る為に全ゆる方策を試みる。脅してまでも。フエードルはこわがり乍らも彼女の乳母の好奇心を引きとめようとする。彼女は既に罪の意識を話していたのであるから。（221行～222行）彼女は今、彼女の告白で生じる恐怖をエノンヌに語る。

239～240行

V．239-240：Et que me direz-vous qui ne cède, grands Dieux!
A l'horreur de vous voir expirer à mes yeux?

エノンヌにとって彼女が養育したフエードルが何もなし得ぬに死ぬのをみるのは最悪だからである。

241行

V．241：Quand tu sauras mon crime, et le sort qui m'accable,

フエードルは自分の告白が悩みのもとになると考える。告白する事は罪状を悪化させる事であると考えている。この情熱を述べる簡単な事実は彼女の現状をより破壊的な現実をもたらす事になるからである。

242行

V．242：Je n'en mourrai pas moins, j'en mourrai plus coupable.

エノンヌは云う。彼女はフエードルの心の弱まりを感じている。フエードルが少しずつ譲歩しているのである。先ず彼女は自分を苦しめている後悔について話した。彼女は罪ある行為を犯してはいないが、彼女はそれを心の中に持っているように見える。その為、エノンヌはフエードルが心の中に持っているようにみえるものを自分に喋らせようと脅すのである。フエードルは告白を未来にむけて話す事で印象づけようとする。エノンヌは彼女の前にひざまずいて最后の懇願をしてみる。神の名においてと言いそえる。エノンヌのこの態度がフエードルの心をきめさせる。

246行

V．246：Tu le veux. Lève-toi.

彼女は屈して手短かに彼女の決意を話す。彼女は決心したにも拘らず彼女を追いつめるエノンヌの前で度を失い、何を話してよいか分らなくなる。フエードルは屈したが虚心な気持になる時点で足取りは又ちゅうちょしてゆくのである。彼女が隠している事をエノンヌに告げるのが困難になった。彼女の話し言葉にラシーヌはアレクサンドルを用いている。

249～250行

V．249-250：O haine de Vénus! O fatale colère!
Dans quels égarements l'amour jeta ma mère!

告白の前にフエードルは自分の母親の事を語っている。彼女の不幸の原因は神の憎しみと復讐であると。神々の復讐の最初の飼食は女王の母パシファ

エであった。彼女は自分の先祖からの重みを思い乍ら気持をしずめようとする。

“モラルの強制力を表す神々と向き合えば、そこにヴィーナスがいて、フエードルのイポリットに対する罪ある情熱が表われているのは、丁度パシファエが非常識な愛故に自分を失くしていったのに似ている”と A. Bonzon は書いている。故にヴィーナス（情念の女神）と云う語は第Ⅲ幕２場でフエードルの愛の告白のあと、イポリットが彼女を遠ざける時に使う語である。

253行

V．253：Ariane, ma soeur, de quel amour blessée,

フエードルの姉アリアンヌはテゼー国王により宮殿から救い出され、彼らはナイソス島に逃げた。テゼー国王はアリアンヌ姫を放り出しフエードルと島から出たのである。アリアンヌ姫の運命はちょうどパシファエの運命と同じであり、フエードルの家族の上におおいかぶさる呪いの標的である。

ヴィーナスは古くからその名を伝統的に借り乍ら、怒りの呪いが選択した家族にまで及ぶのである。しかし乍ら、ヴィーナスは古代から、より人間的な女神であり心に丈訴えていたのである。それが近代になってヴィーナスの性格は或る家族の憎しみの対象に組み込まれ、２代に亘り３人の女性の運命にまで及んでいる。フエードルは自分が“最後のいけにえ”であると云う気持でいる。即ち彼女自身の不幸→最も悲惨な不幸を自分で終りにしたいと思っていると Andrē Delcroix は書いている。

259行

V：259：Aimez-vous?

エノンヌは今やっと分った。フエードルはヴィーナスによって彼女の前にアリアンヌとパシファエがなったと同じ犠牲者であると云うこと、そして彼女達と同じ運命のもとに死ぬと言い乍ら彼女は前の二人の女性と同じように愛の飼食になると云う事である。ヴィーナスの怒りの原因は愛から来ており、この愛が罪あるものであろうと大した重要性を持っているわけではない、抗えるものではなく、フエードルもそれに負けるように運命づけられているのである。

259行

V．259：De l’amour j’ai toutes les fureurs.

“狂わしい程愛している”フエードルが抱いている愛のはげしさ、心神喪

失、気狂いじみたものを理解しなければならない。この言葉はラシーヌの数少ない言葉の一つであり力に満ちたものである。

又更に対称的にみると

a） フエードルの三つの二行詩はエノンヌの質問に答えてはいないが、あるうらみがみられる。

b） エノンヌのフエードルへの三つの質問に莫然と遠廻しにしか答えていない。

（259行、260行、262行）

262行

V．262：Tu connais ce fils de l’Amazone,

フエードルはエノンヌに暗示して遠廻しの表現を用い、イポリットの名前を敢えて出していない。

エノンヌ：イポリット様ですか、まあ何としたことでしょう。

フエードル：お前だよ、その名前を言ったのは。

フエードルに向って言うエノンヌと自分の秘密を言って遂に気を軽くしたフエードルとの間で交わした言葉でエノンヌは理解する。言葉は、はし折られ切られている。264行目のあとしばしの沈黙が続く、エノンヌは意表をつかれたのである。フエードルが以前、イポリットについて話していた様子を思い出す。その四行詩は或る種の恐怖とあわれみの混ったものであった。

アリストテレスは古典悲劇は恐怖と憐れみを喚起させるものでなければならないと言っている。恐怖は登場人物が激しく斗うが故に、その運命に対する憐れみが生れるのである。しかし乍らヒーローは彼の身にふりかかるに相応しい人でなければならない。憐れみは特に欠点と比較してのちょう罰の不均衡さ故に起るものである。

エノンヌはフエードルに対していろいろ質問したり、彼女の振る舞いに怒る観客の代表者としての立場がある。罰としてフエードルとイポリットは死ぬべきであり、観客が持つ憐れみは罰が重すぎると云う所から生じるのである。

この四行詩は同時に前の言葉の結論であり、次に起る予言でもある。フエードルに長い説明をさせる為のときを残しているのである。彼女は比較的心の平静さをとり戻し、エノンヌは何が起ったかを知っている。フエードルは平静な気持になり、彼女の情熱の起因するところに戻る。それは今迄自分が

乳母にずっと隠していたものを説明し、明らかにする事が出来るからである。

第三の動き：　フエードルの告白と説明

それは彼女の愛の起因へのフエードルの説明の場面でもある。

269行

V．269：Mon mal vient de plus loin. A peine au fils d'Egée.

フエードルはエノンヌの懇願に屈服し、心の重荷も軽くなり、過去の出来事や彼女の愛の情念を語り乍ら或る種の心の安らぎを見出している（しかし乍ら、彼女は乳母に愛の事を話し乍らも、フエードルは心の中では死のうと決めている）この言葉の五つの部分を述べる為に、出会いの場、家族の事等を語っている。

A）出会いの場面　（269行～278行）

269行

V．269：Mon mal vient de plus loin. A peine au fils d'Egée.

“ずっと以前から”エノンヌはフエードルの愛はテゼー国王の出発に先立ってイポリット王子の保護のもとに、フエードル女王とアリシ姫を委ねた時からではないかと考えた。しかし実はそれ以前からであった。

270行

V．270：Sous les lois de l'hymen je m'étais engagée,

フエードルとテゼー王との結婚は一つの取引きと義務でなされたものである。

269～270行

V．269-270：Mon mal vient de plus loin. A peine au fils d'Egée
Sous les lois de l'hymen je m'étais engagée,

詩句は次の271行に続いている。

271行

V．271：Mon repos, mon bonheur semblait être affermi,

“安らぎ、しあわせ”についてフエードルは自分の結婚前にはこのように感じていなかった。彼女は結婚を安らぎと幸せが全てであると信じていた。

272行

V．272：Athènes me montra mon superbe ennemi.

とめどなくフエードルはイポリットについて話す。彼女は“自分が”と云う事を避けている。彼女はむしろアテネの街が現在の女王の不幸に責任があ

るかのように言っている。Pradhonの言葉のように“フエードルに私はギリシャの恐怖と華をみる、又イポリットには勝利を感じる”

“敵”この語はラシーヌの重要な語としての位置を持っており、ここでは女王に対するヴィーナスの憎しみとして表わされている。イポリットとの出会いが安らぎを突如こわしてしまった。

273～274行

Ⅴ．273-274：Je le vis, je rongis, je palis à sa vue;
Un trouble s'éleva dans mon âme éperdue;

Garnierの作品の2行では次のようになっている。

Tantot elle palit et tout soudainement
La couleur lui réchauffe, elle tremble fiévreuse.

雷に打たれたような効果、これは知覚と云うよりは視覚によるものである事が分る。ラシーヌは情念の心理的トラブルを表現するのをむしろ好んでいるように思われる。フエードルはヴィーナスの化身であり、ヴィーナスの憎しみが何代にも亘り、女王は自分自身が関知しなかった誤りの為に弁償させられることになるのである。

B）宗教の失敗　（279～290行）

279～280行

Ⅴ．279-280：Par des voeux assidus je crus les détourner:
Je lui batis un temple, et pris soin de l'orner;

ヴィーナスの仕業であると悟ったフエードルは祈りと献金でそれから逃れようと努める。

281～282行

Ⅴ．281-282：De victimes moi-même à toute heure entourée,
Je cherchais dans leurs flanes ma raison égarée.

フエードルの願望はヴィーナスへの犠牲をふやし、憎しみから逃れ彼女の幸せと心の安らぎを得ようとする事である。別の視点からすると、フエードルのいる処にはいつもイポリットの影がつきまとい、女神はイポリットと一体化し、神格化している。フエードルはそのわなに捕えられ、イポリットを熱愛しているのである。

286行

Ⅴ．286：J'adorais Hippolyte; et le voyant sans cesse,

ラシーヌは恐らく自分をとり戻させることが好きなのであろう。“あらゆる処で私は彼（イポリット）を見、至る処で彼の声をきいている”フエードルが情熱を思い起す時、語句の言葉はもっと生き生きとして来るのである。

289～290行

V．289-290：Je l'évitais partout. O comble de misère!
Mes yeux le retrouvaient dans les traits de son père.

この二行の言葉の変化、イポリットの面影にフエードルはとりつかれている。その為に彼女は全ゆる方法を試みる。彼女がテゼー国王と知り合った年令を思い出す、又義理の息子イポリット王子は快活な狩りの好きな若者であったことを思い出す。

C）家族の失敗　（291～301行）

再び叫び、抒情詩のくり返し、289行の言葉のように301行目でフエードルの絶望を示す嘆き、（アンドロマクの中でエルミオンヌが愛故にピリユウスを暗殺し、我がものにする）この愛は憎しみの型として表現されている。ここでは彼女は憐れむべき嫉妬深い継母として“永遠の叫び”で義理の息子を追いつめ、テゼー国王を自分にひきよせ、イポリットを追放しようとさえするのである。

293行．304行

V．293 et 304：Pour bannir l'ennemi dont j'étais idolâtre
J'ai revu l'ennemi que j'avais éloigné:

“敵”はイポリットを示している。

：再会の場で、
：彼女が狩場に着いた時、
：彼女が彼の前に現われた時、

彼女は苦しむ、しかし表面上は威厳を保ち、平静に生きている。彼女は安らぎを見出し、“私は生きてゆける…”と言っている、これは新たな意志表示である。

D）現状　（303～306行）

3度目の“敵”と云う語の使用（フエードルはイポリットとの戦いに熱中する）

私達はフエードルが又最初の時に戻ったかのようにこの韻詩のでだしのところで思う。

304～306行

V．304-306：Ma blessure trop vive aussitôt a saigné.
Ce n'est plus une ardeur dans mes veines cachées:
C'est Vénus tout entière à sa proie attachée.

彼女が自分の情念を思い起す度に、彼女は恥ずかしさを表わし、罪の意識を持つ。そしてそれに責任を感じている。語り乍ら彼女は神々と世襲性にふれ自分の無実を証明しようと試みている。私達はここに責任と無責任とが矛盾して表われているのを見る。責任と云う問題を出すのはジャンセニストのやり方である。

E）結論　（307～316行）

フエードルはこの愛に恐怖をあらわしている。彼女はむしろ死を選ぼうとしている。生き続ける事に煩わしさを感じている。彼女は恐怖から身を守る事をそのように思っている。

310行

V．310：Et dérober au jour une flamme si noire:

“…真黒い焔”この情念は暗示的である。フエードルの父アポロンは光の神である。フエードルの存在は光の中にあって一つの汚点、侮辱であるような印象を持つ。

古典悲劇に於いて、告白は確実な行動であり、ここではフエードルが異教徒として罪深く感じ、恐れている事柄を告白することは罪あることである。

J. L. Barrault は書いている“フエードルは影と光の劇曲である”

告白したフエードルは力尽きて全滅し、もはや“私”と云う語すら云えない。この情念に焼き尽された後、燃えつきたかのようにこの黒い焔も消えてゆく。

参考文献

P. CROUZET	Tout Racine, ici, à Port-Royal (Henri Didier, Paris, 1940)
D. KAISERGRUBER et J. LEMPERT	Phèdre (Larousse Université, Paris 1972)
SAINTE-BEUVE	Port-Royal

P. MOREAU	Racine (Connaissance des lettres, Hatier, Paris, 1968)
CH. MAURON	Phèdre (Librairie J. Corti, Paris, 1968)
CH. DEDEYAN	Racine et sa "Phèdre" (SEDES, Paris, 1965)
R. ELLIOT	Mythe et légende dans le théâtre de Racine (Minard, Paris, 1969)
F. MAURIAC	Vie de Racine (Plon, 1927)
M. DELCROIX	Le sacré dans les tragédies profanes de Racine (Nizet, Paris, 1970)
J. -L. BARRAULT	Phèdre, mise en scene et commentaires. (Seuil, Paris, 1946)